

現代神学 第4回
オンデマンド動画 第2回

世界大戦のただ中から (2) — D. ボンヘッファー —

小原 克博

1

Overview

1. ドイツ教会闘争
2. ボンヘッファーの生涯
3. ボンヘッファーの神学
4. 影響史
5. 今回の課題



2

1



ドイツ教会闘争
「十字架」 (Kreuz) と
「鉤十字」 (Hakenkreuz)
の間に置かれた教会

3

ドイツ教会闘争を学ぶ意義

- ・ 20世紀の代表的な神学者たちの背景 (コンテキスト) を知る。
- ・ 教会と国家 (宗教と国家) の分かちがたい関係を知る。
- ・ 政教分離 (separation of church and state) の多様性
- ・ 近代日本のモデルとしてのドイツとその帰結を知る
- ・ なぜ明治政府はドイツをモデルとしたのか?
(写真: 岩倉使節団)



4

ナチス政権成立時（1933年）の宗教状況

- ・ 総人口の95%がキリスト教徒（現在2/3）
- ・ プロテスタント：カトリック=2：1（現在1：1）
- ・ プロテスタント教会：ルター派、改革派、合同教会（古プロイセン合同教会）、自由教会（バプテスト、メノナイト、メソヂスト等）
- ・ ドイツ福音主義教会連盟：ルター派、改革派、合同教会
- ・ 28の領邦教会（Landeskirche）

5

1933年におけるナチスと教会の関係

- ・ ヒトラー
- ・ 「国民政府はキリスト教の両宗派にわが民族保持のための最も重要な要素を見出す。政府は両宗派と諸領邦との間に結ばれた政教条約を尊重するであろう。両宗派の権利は侵害されてはならない。」
- ・ ドイツ福音主義教会同盟 理事会
- ・ 「一つの強力な民族運動がわが国民をつかみ、立ち上がらせた。…この歴史的転換に対して我々は感謝の『しかり』を発する。それをわれらに送り給うた神に栄光あれ！」

6



ナチスの教会政策

ヒトラーの世界観

- ・ ヒトラーは、カトリックの幼児洗礼を受けている。
 - ・ この世を善と悪、光と闇が戦う場所と見なす、徹底した二元論的世界観を持つ。
 - ・ 「人種問題が世界史を解くカギであるのみならず、人間文化そのものを解くカギである。」
 - ・ 光：北方（ゲルマン）人種 ←→ 闇：ユダヤ人
- 帝国教会の創設：教会を国家に同質化することを目指した。
- ・ 「ドイツ的キリスト者信仰運動」の利用。

7

ドイツ的キリスト者 (Deutsche Christen)

- ・ ナチスが選挙で躍進した1930年頃から始まった運動。
- ・ ドイツ的キリスト者信仰運動の基本原則（1932年）
- ・ 領邦教會的分裂を克服し、一つの福音主義的帝国教会を創設する。
- ・ ユダヤ人はキリスト者の共同体に所属しない。
- ・ 人種・民族・国民は神から与えられた生の秩序であり、人種の混合に反対する。
- ・ 無能者、低価値者に対抗して民族を守る。
- ・ 世界市民主義・平和主義・国際主義を排する。

8

牧師緊急同盟

- ・ 1933年、ドイツ的キリスト者の躍進
- ・ ドイツ的キリスト者が全国の教会選挙の結果、多数派を占めるようになる。
- ・ ルートヴィヒ・ミュラーを帝国教会監督に選出する。
- ・ 牧師緊急同盟の結成（1933年）
- ・ 「**アーリア条項**」（ユダヤ人排除政策）の教会への導入に抗議し、マルティン・ニーメラーが中心になって結成。

9

ドイツ教会闘争の開始——バルメン会議

- ・ バルメン会議
- ・ 1934年5月29～31日、ルール工業地帯ブッパータールのバルメン＝ゲマルケ教会で第1回全国**告白教会**（**Bekennende Kirche**）総会（バルメン会議）が開催された。
- ・ バルメン宣言
- ・ カール・バルトラによって起草された六つの命題。



10

バルメン宣言（1）

- ・ 第一命題
- ・ 「聖書において我々に証しされているイエス・キリストは、我々が聞くべき、また我々が生と死において服従すべき唯一の御言葉である。教会がその宣教の源として、神のこの唯一の言葉のほかに、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならぬという誤った教えを、我々は退ける。」

11

バルメン宣言（2）

- ・ 第五命題
- ・ 「・・・**国家**がその特別の委託をこえて、人間生活の唯一にして全体的な秩序となり、従って教会の使命をも果たすべきであるとか、そのようなことが可能であるとかいうような誤った教えを、我々は退ける。教会がその特別の委託をこえて、**国家的性格、国家的課題、国家的価値**を獲得し、そのことによって自ら国家の一機関となるべきであるとか、そのようなことが可能であるとかいうような誤った教えを、我々は退ける。」

12

ヒトラー宛建白書（1）

- ・ 1936年、告白教会全国評議会がヒトラーに建白書（7章）を提出。
- ・ 第一章
 - ・ 「ナチス世界観は、克服されるべきキリスト教に積極的にとってかわるものとしてしばしば提示され、主張されています。そこでは、血、民族性、人種、名誉に永遠的価値が与えられています。しかし福音主義のキリスト者は**第一戒**によってそのような価値づけを拒むように義務づけられています。またナチスの世界観においてはアーリア人種が賛美されておりますが、神の言葉はすべての人間の罪性を証言しています。ナチスの世界観においてはユダヤ人への憎しみを義務づける**反ユダヤ主義**が命じられております。しかしキリスト者にとっては隣人愛というキリスト教的戒めが立てられているのです。」

13

ヒトラー宛建白書（2）

- ・ 第七章
 - ・ 「わが民族は神によって置かれた限界を突き破ろうとしています。すなわちわが民族は自己をすべての事柄の尺度にしようとしています。これは神に反抗して決起した人間の不遜であります。この関連で、神にのみふさわしい形式でしばしば総統に名誉が与えられているという事態に、私たちは憂慮を表明せざるをえません。今日では・・・総統自身が**民族司祭**という、まさに神と民族とを仲介する者としての**宗教的威厳**を与えられているのです。」

14



15

当時の神学の潮流

- ・ 創造の秩序（Schöpfungsordnung）の神学
 - ・ 家族・民族・国家こそ神によって創造された特別の秩序だとされた。
例：P. アルトハウス
- ・ 自由主義神学
 - ・ 人間の文化的・道徳的進歩とキリスト教信仰の調和を重視した。
例：A. フォン・ハルナック、E. トレルチ
- ・ 弁証法神学
 - ・ 神と人間との間の絶対的な断絶を強調。例：K. バルト、F. ゴーガルテン

16

2

ボンヘッファーの生涯

17

誕生

- ・ 1906年
- ・ ブレスラウ（現在、ポーランドのブロツラフ）で生まれる。父カール・ボンヘッファー（精神医学の教授）がベルリン大学に招聘されたため、ベルリンに移り住む。
- ・ 8人兄弟姉妹の6番目。ボンヘッファー家は、ヒトラー政権への抵抗運動に深く関与していた。

18

神学の学び

- ・ 1923年、17歳でチュービンゲン大学で神学を学び始め、後にベルリンに戻る。
- ・ 1927年、神学博士の学位を取得（21歳のとき）。
- ・ 1928年、1年間、スペインのバルセロナにあるドイツ人教会で牧師補として働く。
- ・ 1929年、ベルリンに戻り、大学教授資格論文に取り組む。
- ・ 1930年、アメリカのユニオン神学校に留学。**エキュメニカル運動**との出会い。

19

牧師・神学教師として

- ・ 1931年、ベルリン大学の私講師として組織神学の講義を始める。
- ・ 1933年、ナチ政権が成立。ボンヘッファーは、ヒトラーが演出しようとした**メシアニズム**の問題を、早い時期に見抜いていた。
- ・ 1934年、**告白教会**によって「バルメン宣言」が発表される。「教会闘争」の開始。
- ・ 1935～40年、フィンケンバルデの牧師研修所で教える。
- ・ 1937年、フィンケンバルデの牧師研修所が国家秘密警察（ゲシュタポ）によって封鎖される。以降、地下活動に。

20

ナチズムの嵐の中で

- ・ 1938年、牧師がヒトラー個人に対し忠誠の宣誓を求められる。多くのキリスト者が「健全な民族感情」を示す。
- ・ 1938年11月9日、**水晶の夜**。ナチの突撃隊やSS（Schutzstaffel、親衛隊）隊員が、各地のユダヤ教会堂に放火し、またユダヤ人の家屋を破壊した。
- ・ 1939年6月、兵役拒否のため、ニューヨークに渡る。すぐに帰国。

21

ラインホルド・ニーバーに宛てた手紙

「わたしがアメリカに来たのは間違いでした。わたしは、わたしたちの国の歴史の困難な時期をドイツのキリスト者たちと共に生きなければなりません。もし、わたしがこの時代の試練を同胞と分かち合うのでなければ、わたしは戦後のドイツにおけるキリスト教的生活の再建にあずかる権利を持たなくなるでしょう。」

22

ヒトラーへの抵抗

- ・ 1939年9月、第二次世界大戦が始まる。ボンヘッファーは、国防軍諜報部の対外連絡員として勤務する。ヒトラーに対する反乱計画に参加。
- ・ 1943年4月、逮捕され、テーゲルの軍用刑務所に入れられる。1年以上。

23

ラトミラル教授（イタリア人）が伝える 獄中でのエピソード

一人の囚人から、キリスト者として、神学者として、ヒトラーに対する反逆行為の責任をどのように取ることができるかを問われる。酔っ払った運転手がクーアフュルステンダムの通りを車を猛スピードで運転しているたとえを語る。犠牲者を埋葬し、遺族を慰めることが牧師の唯一の仕事にはならない。もっと重要なのは、この酔っ払いから無理やりでもハンドルを取り上げることではないか。

24

獄中での生活

- ・ 1944年
 - ・ 7月20日、クーデター失敗。9月、ベルリン近くのツォッセンにあった諜報部の文書が発見され、ボンヘッファーらの反乱計画への関与が明るみに出る。10月8日、ベルリンのプリンツ・アルブレヒト通り8番地のゲシュタポの地下牢に移される。
- ・ 1945年2月、ブーヘンバルト強制収容所へ、さらに、バイエルン・バルト、レーゲンスブルク、シェーンベルク、フロッセンビュルクへ。

25

ボンヘッファーの最後

- ・ 1945年4月9日、SSによる即決裁判、絞首刑。39歳。
- ・ ペイン・ベストに告げた最後の言葉「これが最後です。しかし、私にとっては生命の始まりです。」
- ・ 1945年4月30日、ヒトラー自殺。

26

3

ボンヘッファー の神学



27

安価な恵みと高価な恵み (『キリストに従う』より)

「安価な恵みとは、教説・原理・体系としての恵みのことである。」
(p. 1, l. 16 ※リーディング・アサインメントにおける箇所)

「高価な恵み——それは繰り返し探ね求められるべき福音であり、祈り求められるべき賜物であり、叩かれるべき戸である。それは、**服従** (Nachfolge) へと招くがゆえに高価であり、イエス・キリストに対する服従へと招くがゆえに恵みである。」 (p. 1, l. 29-32)

※ **Sola gratia 恵みによってのみ** (義とされる) : 宗教改革の基本原理

28

「キリスト教の版図が拡大し、教会がだんだんと世俗化すると共に、高価な恵みに対する認識は徐々に失われて行った。世界がキリスト教化される一方、恵みはキリスト教的な世界の共通財産になってしまった。恵みは安価に手に入れるべきものであった。しかしローマ教会は、最初の認識の残滓をまだ持っていた。修道院制度というものが教会と袂をわかたず、教会の知恵が修道院の存在を忍耐深く受け入れたということは、全く重大な意味のあることであった。」 (p. 2, l. 14-18)

29

「修道士のこの世からの逃避は、最も洗練したこの世への愛であると見抜かれた。このような敬虔な生活の究極的な可能性の挫折の中で、ルターは恵みというものを把握したのである。彼は、修道士の世界が崩壊した時、神の救いのみ手がイエス・キリストにおいて差し伸べられているのを見た。彼はその神のみ手を、「どんなに立派な生活を送ろうとも、われわれのわざは空しい」ということに対する信仰において捕えた。そこで彼に賜物として与えられたのは、高価な恵みであった。その恵みが彼の全存在を打ち砕いたのである。」 (p. 3, l. 15-21)

30

「ルターの語ったのは、恵みだけが赦しを与えるということであったし、彼の弟子たちも、言葉の上では同じように繰り返し語ったのであるが、ただ一つ違っていたのは、ルターがいつも自明のこととして考えていたこと、つまり**服従**ということ——それは、彼がいつも、自分は恵みによってイエスに対する最も厳しい服従へと導かれた一人の人間なのだということを語ったがゆえに、それ以上にもはや言う必要のなかったことなのであるが——そのことを弟子たちが省略して、考えもせず言いもしなかったということである。したがって弟子たちの教説は、ルターの教説から見て論難の余地のないものではあったが、しかもそれは、この地上における神の高価な恵みの啓示としての宗教改革の終局かつ否定となった。この世における罪人の義認は、やがて罪とこの世の義認に変わった。高価な恵みは、やがて**服従なしの安価な恵み**に変わったのである。」 (p. 4, l. 31-p.5. l. 5)

31

「**前提としての恵みが安価な恵みであり、結論としての恵みが高価な恵みである。**一つの福音的な真理がいかに語られ、いかに用いられるかということに、どういう意味で問題があるかということ認識するのは、恐るべきことである。ここで言われているのは、**恵みによってのみ義**とされるという同じ言葉である。しかもその同じ原則の誤用が、その本質の完全な破壊を生むのである。」 (p. 5. l. 30-34)

32

「知識の探求に明け暮れたその生涯の終局に、ファウストが「われわれは何も知りえないのだということが、わたしには分かった」と言う時、それこそ結論なのであるが、しかしそれは、こういう言葉が自分の怠惰を正当化するために最初の学期に学生によって使われる場合とは全く違う（キルケゴール）。その言葉は結論としては真理であるが、前提としては自己欺瞞である。」（p. 5, l. 35-p. 6, l. 3）

33

『ボンヘッフアー獄中書簡集』より

「われわれは完全に**無宗教 (religionslos) の時代**に向かって歩んでいる。」（p. 7, l. 26）

「宗教的な人間は、人間の認識が（しばしば考えることをなまけるために）行きづまるか、人間の諸能力が役立たなくなると、神について語る。——しかしそれは、もともといつも、急場を救う**機械仕掛ノ神 (deus ex machina)**だ。それを彼らは解決しがたい問題の見せかけの解決のためか、もしくは、人間が失敗した時の力として、したがって常に人間の弱さを食いものにしながら、つまり人間の限界の所で登場させる。」（p. 9, l. 13-17）

34

「僕は、限界においてではなく真唯中において、弱さにおいてではなくて力において、したがって死や罪を契機にしてではなく生において、また人間の善において神について語りたいのだ。限界にぶつかった時は沈黙して、解決し難いことは未解決のままにして置くことがずっと良いように思われる。」（p. 9, l. 23-26）

「神はわれわれの生活の真唯中において彼岸的なのだ。教会は、人間の能力の及ばない所や、限界にではなく、村の真中に立っている。それが旧約聖書的ということであり、その意味では、われわれはまだ新約聖書を旧約聖書から読むことがあまりにも少なすぎる。こうした**無宗教的キリスト教**がどのような外見を呈し、またどのような形態を取るかについて、僕は今、熟考している。」（p. 9, l. 27-31）

35

「人はこの**成人した世界 (mündig gewordene Welt)**に向かって、世界は「神」という後見人なしには生きられないということを証明しようと試みている。」（p. 10, l. 27-28）

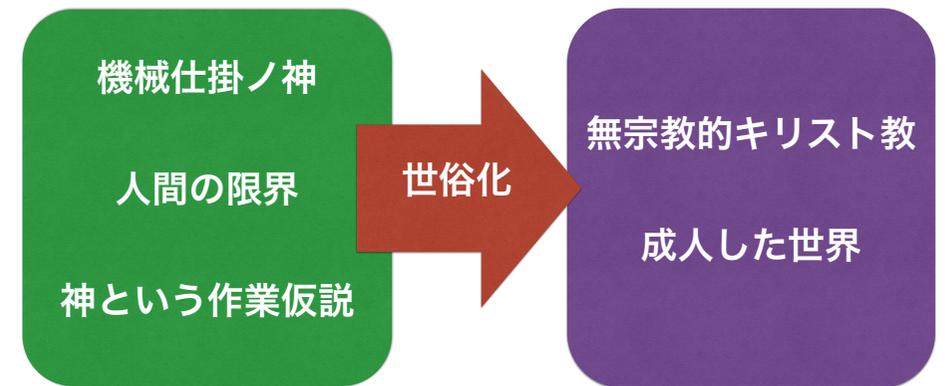
「**神という作業仮説**なしにこの世で生きるようにさせる神こそ、われわれが絶えずその前に立っているところの神なのだ。**神の前で、神と共に、われわれは神なしに生きる。**神はご自身をこの世から十字架へと追いやられるにまかせる。神はこの世においては無力で弱い。そしてまさにそのようにして、ただそのようにしてのみ、彼はわれわれのもとにおり、またわれわれを助けるのである。キリストの助けは彼の全能によってではなく、彼の弱さと苦難による。」（p. 12, l. 28-33）

36

「神について「非宗教的に」語ろうとするならば、世界の無神性がそれによって何らかの仕方で覆われるのではなく、むしろまさに暴露され、それゆえにこそ驚くべき光が世界を照らすような仕方で語らなければならない。**成人した世界**はより無神的だが、おそらくそれゆえに成人していない世界よりも神に近いだろう。」 (p. 13, l. 31-34)

37

獄中書簡のキーワード



38

総括と課題

1. 偽装された悪に対する洞察
2. 生きた言葉・物語を取り戻すこと：既存の概念の再活性化
3. 結論と前提の区別
4. 日常の言葉で宗教の深みを語る可能性：「非宗教的なキリスト教」の模索
5. 神の弱さ・苦しみと救いの逆説的關係：宗教的真理の「逆説性」への洞察

39

4

影響史

40

- ・ 世俗化論
- ・ 神の死の神学
- ・ 他者のための教会
(Kirche für andere)



41

5 今回の課題 (600~800字)

1. リーディング・アサインメント (ボンヘッファー) を読んでください。
2. 上記の内容と今回の講義の中で、あなたの印象に残った (重要であると思った) 点 (複数可) を、その理由と共に述べてください。

42